

レーニン著「帝国主義」岩波文庫、岩波書店 1956年5月25日刊を読む

1. 最新の帝国主義のいわば純経済的根源と社会・政治的根源との関連が、イギリスのブルジョアジーのこれらの指導的政治家たちにとって当時すでに明瞭であったことは、興味のないことではない。
2. チェンバレンは、イギリスが現在世界市場でドイツやアメリカやベルギーの側からうけている競争をとくに指摘しつつ、帝国主義を「真の、賢明で経済的な政策である」と説教した。
3. 救いは独占にある、——資本家たちはこういいながら、カルテルやシンジケートやトラストを設立した。救いは独占にある、——ブルジョアジーの政治的指導者たちはこうくりかえしながら、世界のまだ分割されていない部分の占取を急いだ。
4. ところで、セシル・ローズは、彼の親友でジャーナリストであるステッドの語るところによれば、1895年に、彼の帝国主義的思想についてステッドにつぎのように述べた。「私は昨日ロンドンのイースト・エンド（労働者街）にゆき、失業者たちのある集会をのぞいてみた。そして、そこでいくつかの野蛮な演説をきき——演説といっても、じつは、パンを、パンを！というたえまない叫びにすぎなかったのだが——家に帰る道すがら、その場の光景についてよく考えてみたとき、私は以前にもまして帝国主義の重要さを確信した。……私の心からの理想は社会問題の解決である。すなわち、連合王国の4000万の住民を血なまぐさい内乱から救うためには、われわれ植民政策家は、過剰人口の収容、工場や鉱山で生産される商品の新しい販売領域の獲得のために、新しい土地を領有しなければならない。私のつねづね言ってきたことだが、帝国とは胃の腑の問題である。諸君が内乱を欲しないならば、諸君は帝国主義者にならなければならない。」
5. 百万長者で、金融王で、またボーア戦争の元凶であるセシル・ローズは、1895年にこう語ったのである。ところで、彼の帝国主義の擁護は、ただやや乱暴であつかましいという相違はあったものの、その本質においては、マスロフ、ジュデクム、ポトレソフ、ダヴィッドの諸君や、ロシアのマルクス主義の創始者〔プレハノフ〕その他等々の「理論」となんら異なるものではない。セシル・ローズはただ少しばかり正直な社会排外主義者であったにすぎないのである。……

P130 ~ 131

[コメント]

レーニン特有の激しい言葉遣いではあるが、帝国主義の本質をよく突いている説明。このような形ではなく、どのように自由な貿易や経済活動でお互いの共存共栄、世界の持続的発展を図るかが

現代社会。しかし、どのような問題があったかを知る意味でマルクス、エンゲルス、レーニンの古典から学ぶことも時には必要と考える。

- 2010年6月22日 林明夫記 -